いし，アオキ，ザクロ等一部の植物は載せられなかったとことわっているけど，今日でも普通に触れることの多いモクレン，サザンカなど，いくつかの種類が抜けているし，ツツジ類ではサツキとキリシマツツジだけで，江戸時代に流行し今日でも一般に見かける，オオムラサキ，モチツツジ，ヤマツツジ系の解説が殆ど欠けているのは残念である．また文献も詳しく見たわけでないけれど，必要なものが落ちているのではないかと思われる．膨大な園芸品を少数の協力者のもとで書くことに無理がある．この本でもくろまれているように，古典園芸植物の調査と保存はさらに発展させる必要がある．それぞれの専門家の協力のもとに，現在どのような古典園芸植物があり，それがどこに保存されているか調査しなければならない．この本はその必要性を教えてくれる．

本書を出版した伝統植物研究所は日本の伝統的園芸植物の収集保存に取り組み，現在4,000品種ほど収集しているという．本書の付録として，研究所で集めた品種名の明らかなものの目録があるが，全体で1,000品種程で，植物によって精粗はあるが，現存の品種数からみるとごく僅かである．古典園芸植物の収集保存は，称賛される大切な行為であるけれど，民間機関であることに一抹の危惧がある．日本の公的機関では野生植物の系統保存は行っているが，園芸植物の保存には無関心で，今まで保存していたものもやめたりして，保存はもっぱら民間に依存している状態である．多摩の森林総合研究所でサクラの品種保存を行っているのが唯一の例であろう．園芸植物は一度絶えると再びその系統を得ることは不可能である．永続性のある公的機関の植物園や試験場で，日本の文化遺産である名前の正しい園芸品種の保存を行うことも，大事な系統保存の一つだと思う．（山崎　敬）

□大場秀章：**江戸の植物学**　217＋5 pp. 1997. 東京大学出版会．￥2,600.

東大総合研究博物館で行われた公開講座の内容である．貝原益軒にはじまり，稲生若水，松岡恕庵，小野蘭山，岩崎灌園，宇田川榕庵，水谷豊文，飯沼慾齋，伊藤圭介に至る本草家と，川原慶賀，賀来飛霞らの絵師の作品群，それにからむケンペル，シュンベルグ，シーボルトら外国人学者の交流と欧和相互の影響を軸に，日本の近代植物学を生む基となった江戸時代の博物学の再評価を，読みやすい文体で述べる．これだけのはなしをするには，文献について通覧するだけでも大した努力だが，欧州におけるこの視点からの意識的な調査が行われたことも見逃せない．生物多様性という立場から博物学が見直されようとしているとき，その理解の普及に役立つ本である．（金井弘夫）

□浅野一男：**植物への挽歌** 314pp. 1997. 南信濃新聞社出版局．￥1,800.

伊那谷をフィールドとして40年間，研究に過ごした著者が，失われていく植物を記録に留めるべく著したもの．春夏秋冬の4部に分けてあるが，これは季節によるものではなく，開発による植物の危機，人間生活の変化による危機，植物の生活の知恵と人間の干渉，植物と民俗，という仕分けになっている．春と夏で全体の2/3を占める．新聞の連載記事を元にしているので，一般向きに読みやすく書かれているが，現地を調査した者でなければ書けない内容である．モリアオガエル保護の名目で行われた工事のため，水生植物が無くなってしまったというような具体例が，ほとんどすべての章に綴られており，かつての豊かな自然が失われていく有り様を，ため息とともに記述したものが多い．挽歌と名付けた気持ちが表れている．伊那谷に限らない自然破壊の様々な姿を知るのによい本である．また植物名の地域による違いや，植物に関わる民俗行事などが分布図と共に記録されていて，この方面の参考にもなるだろう．最後に下伊那に於ける絶滅危惧植物400余種類が，危険度と共に示されている．メガルカヤ，イラクサ，ハンノキ，キツネノマゴ，ウラシマソウ，サンショウモ，サイカチ，シュンラン，ネジバナなどが絶滅とか危急とか書かれているのを見ると，あらためてその深刻さがうかがわれる．（金井弘夫）

□Ettl, H.und G. Gärtner: **Syllabus der Boden-, Luft-und Flechtenalgen** 721 pp. 1995. Gustav Fischer, Stuttgart. ca. ￥19,400